彙　報

◉東亞考古學會第二回總會

昨年第一回總會を東京に於いて開催せし同會は去る四月二十八、九の兩日、京都帝國大學樂友會館に於いて第二回總會を開かれた。第一日は同會員の懇談、會務報告等、第二日は公開講演に移つた。京都帝國大學教授濱田耕作博士は開會の辭に代へて、最近歐米に於ける斯學の狀況を述べ、東洋研究の忽にすべきものでないことを最近の視察によつて詳述さるゝ處があつた。北京京師大學導師馬衡氏は「戈戟之研究」と題し周禮考工記の鄭玄の說に對し樂浪發見の遺物に基き一考察を試み、同學導師劉復氏は「新嘉量之校量及推算」となし新始建國元年の銘記ある古量器を基として王莽時代乃至周代の度量衡を試みなるもの、東京帝室博物館歷史課長高橋健自博士は「馬具より見たる大陸文化」として本邦出土の馬具が朝鮮乃至支那と密接なる交涉あるを說き、小川琢治博士は佛人

E.licent 氏の「Ordos 河畔に於ける舊石器時代並に東蒙古に於ける新石器時代の調査を紹介さるゝ處あり、何れも多大の興味を與へるものあつて、同會理事島村孝三郎氏の閉會の辭を以つて盛會裡に終了した。當日午前中、京都帝國大學文學部陳列館に於いて昨年度の發掘事業であつた滿洲貔子窩遺跡の遺物展觀あり、これ又た來會するもの頗る多かつた。〔島田〕

◉京都帝國大學國史專攻學生關東地方研究旅行（下）

十一月一日（火）（史料編纂掛—帝室博物館—帝國圖書館—東西兩大學國史專攻學生交歡會）

午前九時一行は史料編纂掛を訪れた。主任辻博士は一行の爲に沿革事務概要を說明せられ、次いで特に陳列された多くの貴重なる史料について和田、龍、鷲尾、中村（孝也）、高柳、中村（勝麿）各編纂官の懇切なる說明を聽いた。其中に九條殿御記三卷の內には他の流布本に見られないものがあり、その紙背文書に源氏の筆蹟としては現在知られたる最古の物なる義綱書狀が有る。三條公記

錄斷簡八枚の紙背文書は北山抄の原稿で長保元年三月廿九日の日附を有し公任自筆として最も正確な物である。名古屋堀井氏所藏に係る兼實自筆の願文は紺紙金泥、文治五年九月二十八日興福寺南圓堂に不空羂索觀音を安置せし時納めたもので、玉葉の同年同月日の記事に見える文句と多少の出入がある。師大納言恒信自筆の琵琶譜は珍しく兼實の奥書さへついてゐる。廣橋家の藏で現に岩崎家所有の民經記は姉小路經光の自筆であるが、後堀河天皇御讓位の際のもの一卷を見た。次に有名なる神田本太平記十三册は太平記の編纂年代を去る遠からぬ頃のものと覺しく、一般に古き時代は漢文樣に書下した箇處の多かつたことが窺はれる。東寺觀智院の開山杲寶關係の物には同人自筆の佛法和漢年代曆、其師榮海より灌頂法を受けた時の杲寶入壇記、及び其弟子賢法が師の死の前後卽ち貞治元年六月二日より七月七日の其死去、四十九日の法要までの間の事共を具注曆に書留めた杲寶記がある。之らは杲寶の博學殊に平等主義の哲學思想を物語るものであつて、今迄世間に紹介されなかつた物である。

次に戰國時代のものには上杉輝虎の願文があつた。永祿七年六月二十四日信州出陣の際彌彦神社に捧げたもの、「たけ田はるのふあくきやうの事」以下五箇條の假名文で兩者間の感情を露骨に表はしてゐる。久世家の所藏で今回初めて原本が世に出たのである。其他織豐時代のものには「一、樂市樂座にて諸商賣すべき事」以下數箇條ある信長の經濟政策を窺ふに足る永祿十一年九月の制札。天正三年十一月十日彼の妹細川氏室御いぬ宛の知行安堵狀金剛山僧山海松雲が淸正に宛てゝ其出兵を非難した書狀都督命事に豐臣玄以を任ずる明の辭令、秀吉自筆の辭世歌があり、德川時代のものには慶長十六年二月二十八日猪太郎左衞門宛家康の皆濟狀、本田男爵藏澤庵自畫像並自讚、華山並乾山畫の二幅の佐藤一齊畫像等があつた。次に明仇十洲臺灣奏凱圖一卷は東大所藏品であるが、仇英の作か否かは確かでなく、臺灣奏凱圖とあるも內容は正に倭寇を描けるもので、恐らく長江邊の出來事であらうといはれ、作畫年代は萬曆頃と推定される。甲冑の描方は非常に支那化されてゐるが支那人と日本人との顏の相

違は明に看取される。ペリー渡來の繪卷四卷は舊津山藩主松平康春子爵の所藏で、安政元年二月十日浦賀上陸の光景を描き、ペリー饗應圖は安政三年三月三日の出來事を表はしたものである。

史料編纂掛を辭して正午帝室博物館を訪ね、別室の陳列品に就いて歷史課の入田、後藤、伊藤諸氏の說明を聽いた。中に樂浪出土銀板象眼の模樣ある鞍の前輪と覺しきもの、熊本江田發掘古刀の鍔口に羽ある馬を銀象眼し其刀背に同く百濟蓋露王云々とある和臭を帶びた銘文を銀象眼したのを見て、古代象眼技術の比較的に進步せるに感嘆させられた。遠江國榛原郡初倉村牧ノ原出土杳葉は西域出土のものと比較してその系統のものゝ模品と覺しく、支那よりも更に西方の影響を受けて而もよく消化した優れた技倆を認むべきである。大阪冬陣の光景を描いた屏風は黑田侯爵家藏の最上家の夏陣を描いたものと對比すべく、夏陣以前に於ける城の構造を詳にすることが出來る。又犬追物屏風は慶長頃の京都及び其附近の風俗を窺ひ得る點が特に注意された。時間の都合で一旦此處を引揚げて帝國圖書館に赴く。

此處では松本館長、太田司書官に迎へられ、一行の爲陳列された各種の圖書について鹿島氏の說明を聽く。竪系圖の聖德太子系圖は珍しく南北朝時代の日記師守記の自筆本も注意を惹いたが、別して三寶院藏國寶の滿濟准後日記の前半をなす應永年間の自筆本八册は我文學部で先年出版された原本丈に一入の感興を唆つた。德川時代のものでは、正保四年より書初めて慶安四年丸橋忠彌一件の記載もある捕物帳、天保六年の仙石騷動を堀田備中守が取調べた記錄で「寺社奉行廳庫之印」ある仙石道之助一件留五册、御觸書を蒐めて分類した享保集成、判決例を分類編纂した御仕置例類集に依つて德川幕府の司法方面が窺はれた。宇計比言一卷は賀茂眞淵門下の弟子達の入門誓約書を蒐めたものであつて、其中には宣長、千蔭、高保、古道、曜譽上人等の名も見えるが、それと共に眞淵、宣長、信友、篤胤等の自筆色紙の綴を見て其高風を偲ぶことが出來た。瓦版忠義太平記は赤穗義士仇討當時の號外で「はん州淺野內匠頭家人……四十七人亡君の仇を

報ぜんために上總介夜討に入る云々」の文字が讀まれ當時江戸市民驚駭の狀を思ひ浮べることが出來る。次に寛政の寫本なる平治物語繪卷院御所夜討之卷一卷を見る、原本はボストン博物館にあれば見る由もないが、一行が先に松平家で見た原本六波羅行幸之卷と比較して興いと〻深い。

帝國圖書館の見學を終つて再び博物館に赴く。高橋歴史部長の迎接を受け、次で後藤八田兩氏の說明に依て陳列室を逐次見學した。天平十九年聖武天皇の勅命で成つた大安寺資財帳原本、天平勝寶八年十月八日仲麿等の連署ある法隆寺獻物帳、天平より天平神護までの開墾の跡の窺はれる東大寺墾田圖が注意され、石器時代の土偶、勾玉、金冠、銅鐸、鏡鑑、泉貨等の逸品が系統的に配列されたのを見ては多大の參考になつた。次に美術課の榎本氏の案内で繪畫數十點を見る。高橋家藏傳唐禪月大師作十六羅漢、傳元錢舜舉作蓮華圖等に依つて唐宋元の藝術にふれ、岩佐又平宮川長春同春龜同一英及び長谷川雲旦の製作を見ては浮世繪畫風の變遷が窺はれ、鍬形蕙齋作近世職人盡三卷は德川時代社會糅の一面をも偲ばれる。彫刻では近年著名となつた一五九八年在銘貨狄尊像に好奇の眼を睜つた。殊に嬉しかつたのは一行が鎌倉明月院で見ることの出來なかつた上杉重房木心乾漆の彩色像を此處で見出したことである。

一行は博物館を辭して今宵山上御殿で催される東西兩大學國史專攻學生交驩會へと急ぐ。會は辻博士の挨拶に始り、三上博士の國史學研究の今昔に關する思出深き興味ある講話、三浦博士の答辭があつて後、教官學生交々立つて或は各自の抱負を語り、或は旅中の感想を述べ、歡談高潮に達した頃宴は閉ぢられた。

十一月二日(水)（常盤神社—水戸彰考館—德川家別邸—栗田家）

午前六時二十五分上野を發し、九時五十分水戸着。水戸高等學校の今村教授に迎へられ、直に常盤神社に參拜し義烈二公の英靈を偲び、終つて彰考館文庫に赴いて雨谷氏の好意に依り、藏書中の主なるものを披見した。大日本史の原本は更にもいはず、之が編纂の過程に於ける各種の蒐集勞作を歴覽することが出來て、日頃の渴望を

醫したのは一行に取つて又なき眼福である。編纂史料として蒐集された文獻の中に、日本書紀神代卷があつた。

第一卷の奥書には

干時、嘉曆第三執禪之年季秋中旬閼茂之日、就長和親王勅請、以遍照寺法務之日、祕決授春公和尚畢（梵字六）（癸巳季六十八法年四十一）

嘉曆三年戊辰夏五十七日、手親終書點之功者也、一字一畫不敢借他之筆矣、心宗沙門劫外曇春於巨福山建長蘭若書窓記之、

とあり、日本紀の傳授の此頃に存在した事が窺れる。又第二卷の奥書には次の字句がある。

竊以有體者方發心識、有心者必具佛性、々々法性遍法界而不二也、自身他身與一如而平等也、云佛云神性相互體焉、云內云外忘心別執矣、而我朝是神國也、以崇神爲朝務、我國又佛地也、以敬佛爲國政、（中略）遂使佛法王法共及煙滅、幾內幾外併致荒廢、豈不愼之寧、不忠之故、拾廐宿皇子之本記、任大舍人親王之雜訓、不殘相承之祕傳、奉授曇春禪師畢云々

藥學會見

茲に神國佛地の對立を見るのは興味が深い。續日本紀卷一の表紙に辛未校正（俗年六十八法蟻四十一）（元祿四年）、奥に前權中納言從三位源朝臣光圀考訂とあるのも注意される。こゝにも金澤文庫本の法曹類林の一部があつた。令集解は三種あつたが、七册本四十卷の最後の卷の奥書には朱筆で弘化二年龍集乙巳季春之初以擁書樓本校了云々と記され、同三十六册本第一册官位令の奥には寛正四年五月二十四日一校畢、第二册の奥には文化十三年三月十四日以温故堂本校合之且句讀了東都王臣源朝臣與淸、第三册の奥には藍筆で文化十三年四月朔日以温故堂本校正之且下讀了王臣東都八氏高田與淸、第十一册の奥には弘化乙巳夏五月端午前一日以一本校畢樓本書屢經謄寫魯魚在多令不妄改訂姑注異同以備考云とある。別に和學講談所本令集解は一、七、八の三卷が缺けて居り、第二卷の奥書に文政三年仲夏以彰考館本比校了檢校塙保己一とあり、次に朱で安政三年十月四日一過了小野保忠と書かれ、又同九卷に文政三年五月以彰考館本比校了とあり、第三十卷は文政三年六月以彰

考館本比校了こあつて何れも文政三年の校合に係てゐる。古寫本愚管抄七冊は高田友清の類集したもので、松屋の朱印があり、編纂事務に都合よきため重要な箇所に朱線を引いてゐる。同書卷七奥書には今以三本校正一過畢、猶不可解亦不爲尠、且假名等以國史及萬葉和名抄等古樣式、悉質正、或難解及兩可者闕如、姑書以竢他日善本、河誓等云、寶曆十年庚辰十一月二十二日伴宿禰誌、文化九年五月校合了松屋源與清こある。殊に興味を惹けるは寛正古寫梅松論で、實戰に臨める者の筆になること覺しく、

此集書寫以老手瀆紙面事雖其憚多此論之題目於北野參籠老尼同老比丘尼達鄰廊而聞語書之誠隔壁指花親於身已依本證如斯聞歟愚老會又父子三人行末モ更ニ白縫ノ筑紫路マテ供奉仕剩一人ハ御船ニ乘後レ千里之陸地ヲ踏多々良濱ヘ參リケルトナン此條全非僞任當神之昭鑒其末子トシテ往昔ノ劍戟ヲ今筆鋒ニ移換テ執テ先君之威風ヲ記置テ後人ノ觸耳事是又非忠儀乎サレハ勇士ハ戰場ニシテ馬ヲヤスムル時楯上ニ墨ヲ磨シテ注其古文トナン于時寛正七ノ歳龍集丙戌仲秋下旬畢

この跋語が見える。參考太平記を作成する爲に蒐集した太平記の異本に天正本、南都本、毛利本等があり、又島津家本を以て補寫した異本太平記纂がある。後者には延寶己未夷則念六偶得島津氏所藏之本謄焉こ奥書に見える。次に志類に就て歴代編纂者の勞作を舉ぐれば、藤田幽谷自筆の神祇志には栗田寛博士の加筆があつて每頁附箋を以て徹はれてゐる。別に青山延彛、藤田東湖の神祇志も見受けたが此等は後に集大成されて栗田博士の神祇志こなつたのである。其他元祿六年安積覺稿の食貨志一册、川口長孺稿同書一册、栗田博士附箋の豐田天功稿同書五册、天功自筆の氏族志稿、幽谷自筆の刑法志稿、天功稿栗田博士附箋の刑法志稿、天功等稿兵志等も閲覽した。其他栗山愿著保建大記の前身をなす保平綱史もあつた。編纂備用の爲にはいろは順に編まれた類聚東鑑人名考、萬姓考證、續日本紀地名索引等より支那朝鮮蝦夷和蘭言語等を抄錄した外國異聞に至る迄あつて、此修史事業の領域の深宏なのに感嘆させられた。次に眼目たる大日本史草稿の中にも後醍醐天皇紀は義公の最も力を入れられ

た所こて、朱筆の訂正紙面を充たして居る。列傳伊藤會我傳には義公の自筆で祐成の母が貞女か否かを論じたこころがあるが、それらを通して大日本史全體に流れる思想の一班を察する事が出來る。尙ほ水戸開國論集中には藤田幽谷が會澤安に宛てゝ彼の新論を讀んだことを述べてゐるが、安自筆の新論稿を見るこ其の奥書には、

余客歲著新論七篇、欲有所獻未果令、茲季春我賜答、先生應召抵江邸固囑之、先生得呈公覽、一日公語曰、是書多涉諱忌、不宜公行於世、然人成私傳寫、不著名字、亦不妨也、先生有書傳命、迺謹錄之卷末、以藏筐裏云丁亥、月常道狂夫題

こ記されて居り、卷尾には無名子こ書いて實名を署してゐないのは時代の風潮も察すべきである。かくして我等は水戸修史事業の如何なるものかを概觀し、一藩の力を擧げて猶ほ二百五十餘年の歲月を費し、資料の蒐集に、諸本の校合に、草稿の立案に、史實の考證に、歷代其局に當つた人達の努力辛酸の跡を歷々目睹するが如き心地して、そゞろに感激を唆られたのである。

一行は更に德川家別邸に赴いて三百年前に於ける耶蘇敎徒の遺物を見た。吉利支丹法服諸器物目錄略圖は寬政十二年六月二十九日藩儒立原翠軒が水戸藩のキリシタン史料及び法器類を圖錄したもので、それらの實物は別函に收められてゐる。サトウ氏の報告で有名になつた羅馬字綴日本語のドチリナ、キリシタン、卷子本の吉利支丹十戒、宣敎師が佛敎宣布の樣式を攝取した事を示す佛書抄錄見本等何れも無二の祕籍である。

最後に一行栗田氏邸に赴く。故寬先生の所謂書窟は二階八疊の間で、床には先生の生けるが如き油畫肖像が掲げられ、室の一隅にある古机の旁には故先生手澤の草稿本が堆く積まれてある。十三歲の筆こいはるゝ和歌の抄寫本、同年會澤安の夷狄篇を讀んで著された神器論を閲しては頴脫の天才が認められる。數十册の涉史漫錄は著述の用意に作り置かれた備忘錄であるが其の博採旁搜の努力は驚嘆すべきである。特選神名牒稿本、迦多理碁登、國造本紀考等の自筆本等一つこして敬慕の念を唆られぬものはなかつた。斯くて一百部五百卷の著書の一部や、

許多の手澤本等を見て行く中に秋の日は暮れ果てた。一行は故先生の生前の貴き努力について勤氏の盡きぬ思出に耳を傾けて我國史界の先驅者に感謝の心を捧げ乍ら、暮靄に包れた同邸を辭去し、午後六時二分の列車で東京へ引返し、翌日歸學の途に就いた。

以上往復一週間の研究旅行に於て、一行の歴訪した神社三、佛寺七、舊家四、官省學校及文庫七、其他二三の史跡に及んでゐる。此間寓目した記錄文書圖繪等に就いては略記載した通りであるが、別して金澤文庫本の如き一行の歴覽中に前田家、內閣文庫、宮內省圖書寮、彰考館文庫等に各數種を架藏さるゝを見て、同文庫本の散逸の跡を迎ることが出來たのは、此行に依つて始めて望まるゝことゝ愉快に堪へなかつた。終りに我等一行の爲めに寶庫を開いて希覯の圖書遺物等を展覽せしめ、又貴重の時間を割いて說明の勞を執られ、多大の稗益を與へられた諸賢に向つて心からの感謝を捧げて此の稿を結ぶ。

〔布村・船津〕

◉帝國學士院授賞式

帝國學士院は去る四月十四日同院に於て授賞式を行ひたるが其內、史學に關する受賞者左の如し。

帝國學士院賞

日本歌謠史（著書）　文學博士　高野辰之

◉東北文化研究の刊行

東北地方は土地僻在して古來中央文化の及ぶこと頗る遲く、遺物遺蹟土俗慣習等の破壞變遷を見ること割合に少くして、今尙ほ往時を其まゝに語るものが殘存せる狀態にある。隨つて此地方に於ける各般の事物を調査研究し、夫によつて古來の文獻の不備を補ひ歴史の眞相を捕捉し、更に夫を他地方にも及ぼして我が先史時代、原史時代の史實を推究する事は頗る興味あり且つ有益な事である。併し乍ら此の貴重なる史上の寶庫ともいふべき地方にも現代の文明は續々と侵入して遺蹟舊物等を次第に破壞攪拌しつゝあるから、東北地方の研究は今日一日を緩ふする事の出來ない時である。茲に於てか文學博士喜

田貞吉氏は三年以前より奥羽史料調査部を東北帝大法文學部内に設け、自ら主任となりて奥羽六縣新潟縣及び北海道方面の資料の採訪調査に著手せられ、既に得られた所のものは可なりの數に上つて居るから今回それらの資料及び研究を學界に紹介發表すると共に同好者の研究發表資料紹介の機關にも供せんため本年八月一日より月刊雜誌「東北文化研究」を發行し、三ヶ年三十六册を以て第一期分を完結し、其後は事情が許し希望者があれば改めて繼續發行するこの事である。史上未だ開拓の斧鉞が十分に行屆かなかつた是等の地方の事物を調査研究し、其文化の沿革を纒めて之を提供される事となつたのは學界にとつて誠に喜ぶべき事である。（毎號本文百二十頁、圖版二葉、東京史誌出版社發行、價半圓、十二册五・七〇）

●京都帝國大學文學部史學科

本學年講義題目

國史

（講義種別）			
普通	三浦教授	國史概說	毎週二
	西田直教授	國史概說	二
特殊	三浦教授	黎明期の近世文明（前學年の續）	二
	西田直教授	古代の文化（前學年の續）	一
	今西教授	朝鮮史の特殊問題（第一學期）	
	喜田講師	日本民族史（第二、三學期）	
	山田講師	日本佛教史（淨土教の發達）	二
演習	三浦教授	明治時代	
	西田直教授	近世經濟生活の發達	一

東洋史

普通	桑原教授	東洋史概說	二
	矢野教授	東洋史概說	二
特殊	桑原教授	史記漢書の研究	
	桑原教授	唐律と明律との比較	一
	矢野教授	支那外交史	一
	羽田教授	西域史（隋唐時代）	二
	那波講師	開元天寶時代	二
演習	矢野教授	近代支那史の諸問題	一
	羽田教授	東西交通史上の諸問題	一

西洋史

普通　中村善講師　西洋史概說（第一部）（第一學期）

植村助教授　西洋史概說（第二部）　二

特殊　濱田教授　希臘考古學　二

植村助教授　Reformation に及ぼせる影響の近世政治　一

時野谷助教授　最近世史　二

演習　植村助教授　中世の政治及文化　D. Schäfer, Mittelalter. Lambeck, Quellensammlung.　二

史學研究法

普通　西田直教授　史學概論（理論及方法）　二

地理學

普通　石橋教授　人文地理學概說　二

小川教授　自然地理學概說　二

特殊　石橋教授　交通地理學　二

小川教授　氣候學及生物地理學　二

小川教授　地學史（第二、三學期）　一

熊谷助教授　地圖學（第一學期）　二

春本講師　地理學實習（第二、三學期）　二

演習　石橋教授　政治地理演習　二

考古學

普通　濱田教授　考古學概說　二

特殊　濱田教授　希臘考古學　二

演習　濱田教授　支那考古學　二

副科目

中村直助教授　古文書學各說　二

三浦教授　史料解題及講讀　一

今西教授　朝鮮史籍解題及講讀（第一學期）

澤村助教授　日本美術史概論（哲學科講義）　二

羽田教授　二十二史劄記　一

時野谷助教授　西洋史講讀 {Ranke, Über die Epochen der Neueren Geschichte.}　一

矢野教授　支那外交史　一

喜田講師　國史ニ地理（第二、三學期）　二

中村新教授　地史學講義（理學部講義）（十一月以降）

山根講師　地形學（理學部講義）（第二學期）

ネフスキー講師　露語　第一回　二　第二回　一

田中助教授　羅典語　二
菊池講師　希臘語　二
松本講師　阿拉比亞語（アラビヤ文法／コラーン及千一夜物語）　二
小西教授　教育思想概說　二

●昭和三年卒業論文題目

京都帝國大學文學部に於ける本年史學科卒業論文の題目左の如し。（△印選科生）

國史學專攻

石清水八幡宮の研究　六人部克己
鎌倉文化特に武士の精神生活に就いて　藤直幹
貨幣流通の發展　小葉田淳
歸化氏族の研究　三品彰英
近世に於ける奢侈禁止令に就いて　天野高信
平安朝末期の宗教意識に就いて　△池田源太
島津齊彬につきての一考察　△飯沼守麿

近世の內國海運　△原與作
平安時代の商業について　△津川長治郎
水戸藩の攘夷論　△安藤德器

東洋史專攻

漢末に於ける士風の推移に就いて　志賀平左右
唐代の科擧について　今石二三雄
唐代河北三鎭に就いて　石橋達一郎
晉室東遷以前に於ける江南の開發に就いて　小川茂樹
魏晉時代に於ける五胡種族の塞內移住雜居に就いて　岡宮自猛
春秋時代に於ける會盟　河合正武
漢代の法律に就いて　刈田文雄
回鶻五城考（西徙以後の回鶻國々都の研究）　安部健夫
清朝の對漢人統御策に就いて　浦廉一
唐時代の奴隸に就いて　△平澤良之助

支那史專攻

近代支那に於ける銀の移動に就きて　小竹　文夫

西洋史專攻

十七世紀に於ける英國大內亂の諸原因探究　石井　正人

東阿弗利加に關する一八八六年の英獨協約　金子　久親

Socrates の死　吉原　好人

淸教徒革命、特にその共和政治に就て　久司　慶三

獨逸の教會改革の發端に就いて　平井　謙二

初期ビザンツ文化の一考察　△津田　巖

十六世紀後半に於ける英西關係に就いて（1568—1588）　△中村　秀雄

最近世史專攻

十九世紀初頭に於ける英國の救貧事業に就きて　△八木　正治

英國の教區(parish)に就いて　△佐々木　忍

地理學專攻

熊野洋沿岸の產業と村落　入江　久夫

丹波高原の地形と交通　岡本　重彥

菱伊川東流以後の沖積作用　松本　博

◉京都帝國大學第十九回夏期講演會

京都帝國大學は學術普及の爲め例年の如く來る八月一日より夏期講演會を開催して一般有志の聽講を許すこいふ、講演科目中、史學地理學に關係あるもの左の如し、（詳細は京都帝國大學本部に照合すべしと）

本邦土地所有權の沿革　法學部助教授　牧　健二

岩石學一般　工學部助教授　上治寅次郎

科外講演

埃及旅行談（幻燈使用）　文學部教授　濱田　耕作

◉史學研究會

例會　三月二十四日午後一時より京都帝國大學樂友會館樓上にて開催、左の兩氏の講演あり同五時閉會す、當日は兩講演に關係ある寫眞を展觀に供せられた外、花園後

醍醐兩院宸影及び帝王宸影奥書、攝關影奥書を寫した繪葉書を來會者に贈呈せられた。

似繪の豪信法印の研究　名匠　栗野　秀憩君

鎌倉時代には藤原隆信、其子信實が出て似繪が大に流行したが、信實五代の孫豪信は祖業を繼いで似繪を完成した人である。豪信の畫の代表的のものは歴代帝王宸影攝關影及び大臣影である。之はもと曼殊院に藏せられてゐたが明治十一年に宮内省へ献上し、今は模本を藏してゐるに過ぎぬ。其中の帝王宸影は頗る變化に富み、銘文は世尊寺行尹と尊圓親王の筆、畫は爲信、豪信及び康安二年頃の畫家の作であつて、正和以前から康安二年迄の間に作られたものである。豪信は信實の六代目であるといふ説があり、尊卑分脈も其樣にしてゐるが、花園院宸影奥書、同院宸記、攝關影奥書に依れば五代目なる事が明に知られる云々。

ベルリン懷古　文學士　坂倉篤太郎君

ベルリンは十三四世紀頃より發達し、元ケルンとベルリンとが自治團體を爲してゐたが、十四世紀の初頃に兩市は合併し、十五世紀の初に稍や衰微した所へ、ホーヘンツォルレン家が入り來つて君主專制政治を布いてから、次第に盛となり、フレデリック大王の時には市街の裝飾に著手し建築を美麗にした云々として此市の發達を概説しそれより此市の古橋、古寺院、舊家の持つてゐる古傳説に就て語られた。

●讀　史　會

例會　三月十九日午後六時半より本學年最終の讀史會を樂友會館第一號室で開く。集る者三浦教授、中村、牧助教授、其他總て二十七人。左記卒業論文梗概の發表終りて三浦教授より總評あり。

平安朝時代の宗教意識　池田　源太君

先づ宗教意識を歴史的考察の對象とする可能性に就いて述べ、次で本論に移る。第一章を藤原時代の宗教意識の概觀、第二章の前節は直接的神の要請、後節は罪惡意識の深化とする。更科日記枕草子乃至源氏物語に表はれる救濟觀念には切實なものが無つた。道長出家の動機は

此世の榮樂の極み未來空恐しこの恐怖感より來ること光源氏と同軌であつた。然し修善儀禮を顧みず、一圖に空也上人に縋つた人達には切實な欣求と共に深刻な罪惡觀念が認められる。淨土教の興つた原因は天慶以來の戰亂の事象より、寧ろ內面的な罪惡意識の深化に求む可きであらう。

島津齋彬についての一考察　　飯沼守麻呂君

弘化年間琉球が佛蘭西と通商條約を結ぶことは幕府の對外政策に甚大な關係を有するに關らず閣議をして此を認めした黑幕に齋彬があつたこと、內は家門の紛訌、外は將軍繼嗣問題から延いて幕府の慊疑等による自家の窮狀を打開する爲めに天璋院の入輿を企てて成功した彼の手腕、更に晩年出府して兵力を以て幕政を改革せんとした膽略に說き及び、かくの如き重大事を處理し又處理せんとした彼の人格は其の家庭的不遇の間に鍛へられた事情を說明する所があつた。

支那學會

例會　狩野名譽教授の支那より歸朝、小島助教授の歐洲よりの歸朝と新入學生の歡迎を兼ねて五月二十九日午後三時より京都帝國大學々生集會場南室にて開催、左の講演あり午後六時散會、有志者は散會後晩餐會食したり。

一、佛蘭西に於ける支那學發達の歷史概觀

文學士　小島　祐馬君

十八世紀に於けるフランスの支那研究は主として支那在住の僧侶の手によつてなされた、それには當時論爭の標的となつた典禮問題が關與せることと思はれる。從つてその研究も儒教が中心となつてゐた。又他方に於いてフランスの社會が政治組織の轉換を要請してゐた爲めにその基礎を支那に求めた。その代表者と看るべきは、ケネーとヴォルテールであるとて、その思想の支那的要素をのべらる。

一、唐代の五經正義撰述の經緯につきての二三の疑問　　文學博士　鈴木　虎雄君

五經正義の成立年代に關する疑問を提示せられ、更に

之と關聯をもつ經典釋文の成立年代にも言及さる。

◉考古學談話會

四月十九日午後五時から京都帝國大學樂友會館に於いて歐米視察の途から歸朝せられた濱田耕作博士の歡迎談話會を開催した。會するもの十數名、博士は八ヶ月に亙る見聞中から約二時間に及ぶ興味ある旅行談を試みられた

◉民俗談話會

近年考古學、人類學、風俗史的研究は隆盛となり、民族學、土俗學も之に伴つて研究其歩を進めて來た。京都帝國大學史學科の若き人々の間にも此聲が起り、民俗談話會なるものを組織され、民俗學に關する會員相互の研究發表實地調査採訪が計劃されて已に數回の例會と見學とが行はれた。

第一回例會（昭和二年十二月二日）左の講演があつた外、會員の年末年中行事の調査報告等があつた。

一、人身御供に就いて　文學士　水野　清一君

一、民族學の傾向　小川　五郎君

第二回例會（昭和三年五月十四日）

一、上代精神生活に表れたる牧馬　文學士　佐藤　虎雄君

一、ハワイ島の土俗　教授　西田直二郎君

第三回例會（同六月四日）

一、周防大道村の笑講について　小川　五郎君

一、山の神の研究　文學士　藤田　元春君

右の外實地の見學としては五月十日壬生狂言を覽、また第二回としては六月二十日、鞍馬の竹切神事を調査した。〔佐藤〕

會報

◉寄贈交換圖書

文祿元年天草版吉利支丹教義の研究（橋本進吉著）　東洋文庫
綜合日本史（下）　栗田元次
東洋學報　十七の一　東洋學術調査部
史學雜誌　三九の三、四、五　史學會
國學院雜誌　三四の四、五　國學院大學
經濟論叢　二六の四、五　京大經濟學會
商業と經濟　八の二　長崎高商研究館
社會學雜誌　四八、四九　日本社會學會
觀想　四六、四七　觀想發行所
人類學雜誌　四三の三、四　東京人類學會
考古學雜誌　一八の三、四、五　考古學會
史學　七の一　三田史學會
民族　三の三、四　民族發行所
歷史地理　五一の三、四　龍谷大學論叢社
龍谷大學論叢　二七八、二七九　龍谷大學論叢社
史蹟名勝天然記念物　三の三、四、五　同保存協會
中央史壇　十四の三、四、五　國史講習會
伊豫史談　五二　伊豫史談會

◉會員動靜

入會

福岡市北舟町二十五ノ四　小林榮三郎氏
（右紹介者　玉泉大梁氏）
奈良縣生駒郡都跡村　溝邊文和氏
（右紹介者　新町德之氏）
東京府下池袋丸山一六〇一、太田方　市川勇氏
（右紹介者　楊能漸氏）
京都市下鴨松ノ木町　清水三男氏
（右紹介者　中村直勝氏）
京都帝國大學醫學部解剖學教室　金關丈夫氏
京都帝國大學文學部史學科　市川文藏氏

京都帝國大學文學部史學部　高橋久之助氏
同　秋山　國三氏
同　中村　信義氏
同　山本　守氏
同　佐藤　一雄氏
同　金倉　英一氏
同　李　英淳氏
同　吉田　三郎氏
同　有光　敎一氏
同　楠　正雄氏
同　佐々木龍作氏
同　澤井　浩三氏
同　前田　一良氏
同　岩崎重太郎氏
（右紹介者　島田貞彦氏）
京都龍谷大學史學科　和田　邦雄氏
同　眞門　孝雄氏
同　松井　政雄氏
（右紹介者　濱中寛淳氏）

■退　會

神谷哲太郎氏　服卷量平氏　中條秀雄氏　狩野直喜氏

■逝　去

碓井小三郎氏　鹿島圓次郎氏

右謹みて哀悼の意を表す。